

---

# Fate 戦いのはてに残るもの

地獄の傀儡師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate 戦いのはてに残るもの

### 【Zコード】

Z5350Y

### 【作者名】

地獄の傀儡師

### 【あらすじ】

青年は一人Fate/stay nightの世界に行く。zeroの戦いで、得たものを見る為に。Fate/stay nightの夢小説です。前のFate/stay nightに入した青年の、設定とストーリーを変えた話になっています。よかつたら感想などください。

## 彼等の残した物（前書き）

介入する前の話です。

過度な期待はしないでください。暖かい目で、読んでくれるとありがたいです。

## 彼等の残した物

「間桐雁夜、この男一体何を考えていたんだ?」

俺の名前は、夜月彩雅。まあ、人殺しの仕事をしていくのでもない人間だ

仕事のない時は、漫画やアニメを見て、暇を潰しているかなりの変わり者でもある

そして今丁度、Fate/zeroの小説を読み終わつたところだ

「何故、人の為に命を掛けることが出来る?」

Fate/zeroの、間桐雁夜という男。自分の命を削り、第四次聖杯戦争にバーサーカーのマスターとして参加

目的は、遠坂時臣が間桐家に養女に出した間桐桜を救う為

奴はその為に、身体に間桐臓硯の刻印虫を宿し、即席の魔術師となつた

だがその代償はあまりにでかく、命を大幅に削り容貌は死人のよう  
に蒼白になり、魔術を使つだけで血を吐く程の苦痛を味わつていた

何故だ？何故其処までして、一人の子供を救おうとする？

間桐の家から、逃げ出し間桐の呪縛から解放されたのに、間桐桜の  
為に間桐に戻り日常も命を全て捨てた

何故何だ？理解出来ない。他人の為に、其処までしてやることが

奴の好きだった、遠坂葵の子だから救おうとしたのも、あるだろう  
だがいくら何でも、普通其処までやるか？好きだった人の子供とは  
いえ、他人を其処までして救おうとする

俺には分からない。それが正しかったのか、正しくなかつたのかわ

だが結果は、バーサーカーの宝具の解放に魔力を全て持つてかれ、  
刻印虫も全部喰われて敗北

聖杯戦争後、ギリギリ生きてはいたが間桐桜の目の前で、間桐桜を

助けた幻影を見ながら死亡

更に死体は、間桐桜の田の前で蟲に食われた

この結果を見ると、奴は正しいどころか、参加しないほうがよかつたんじやないか？と思う奴も恐らくいるだろう

しかし俺からすると、只の馬鹿にしか思えない

自分の人生も、生活も命も捨てて他人の為に、しかも子供の為に死ぬなど。そして結果は、さつきも言つた通り助けられずに、助ける奴の目の前で死亡

まあ、人には人の考えがあるのだろうが、俺には分からんな

そして、もう一人気になるのは衛宮切嗣。正義の味方に憧れる、理想主義者。だが、第四次の戦い方を見ると、正義の味方などと全く思えない戦い方だった

まあ、勝つために手段を選ばないのは、分からぬことはない

だが最後に奴は、救う筈の多くの人間を、聖杯を破壊したことで殺

した

だが、聖杯の正体を知つて絶望するのは確かに分かる

聖杯は、人を殺すという方向性を持つた、呪いの魔力の渦と化すようになり、人を貶める形でしか願いを叶えられない欠陥品などと、分かれれば確かに破壊するかもしれない

「つと、こんなこと考えてても仕方ない」

所詮は、アニメの話。深く考えたところで意味はない

特に、やることもなくなつたな。仕事もないし、読む小説も漫画もなくなつた。今から何をしよう?

「暇なようだね」

何だ?突然声が聞こえた。だが周りには誰もいない

「誰だ?」

自身の刀の柄に手を置き、尋ねる

「暇なら、連れて行つてあげよう。その世界に」

「何を言つて……！」

何だ！？目の前が、真っ白になつて……いく。俺は意識を失い倒された

あれから、何分たつたか分からぬ。目が覚めると、俺は知らない場所にいた

「……此所は、何処だ？」

目の前に広がる光景は、只真っ白い空に白い地面。まさか、この前殺したマフィアの残党に捕まつたか？

だがそれなら、こんな所に連れてこじにすぐ殺されてるか

なら此所は一体？

「驚いているようだね」

声が聞こえ、刀の柄に手を置き振り返ると

「誰だ？お前は？」

其所には、白い服を着た青髪の青年が立っていた

「誰だと言われてもね。まあ簡単に言えば、平行世界を管理する管理者の一人だよ」

平行世界。幾つもの、選択などによって枝分かれする世界のことか

「その管理者が、人殺しの仕事をしてる俺に何か用か？」

青年を、睨みながら問う。警戒は勿論緩めない

「君が、暇そうにしてたからさ。でものは相談何だけど、他世界に行つてみないかい？」

「ほつ、他世界か。・・・いいだりつ。行ってやる」

丁度暇だつたし、仕事の依頼もなかつたからな

「へえ、何か聞かれると思つたんだけどな。予想外だよ。じゃあ、  
行く世界はFate/zeroの世界でいいかい？」

「コイツ、俺がFate/zeroを読んでいたのを知つているよう  
だな

更にちょっとだけ、行きたいと思つていたのも知つているようだな。  
だが

「いや、Fate/stay nightの世界に行かせてくれ」

「へえ以外だな。理由を聞かせてもらえないかい？」

「確かに、Fate/zeroの世界に行けば、色々と分かる」と  
があるだろう。だが、結末を知つている世界に行つても、つまらな  
いだろ？」

結末が分かる故に、それを変えようとした結果、話事態が変わつ  
しまつたら知識があつても意味がない。ならまだ話を知らない、F  
ate/stay nightのほうに行つたほうがいいだろ？

「ほひ。 ほひねえ」

「それに・・・戦つてみたいんだよ」

「ほひ」

「知識のない状態で、サーヴァントと真っ向から戦つてみたい。それと・・・」

「それと何だい？」

「見てみたいんだ。第四次聖杯戦争を、やつた結果何が残つたのかを」

あの戦いで、一体何が残つたのかを見たい。特に、悲劇や悲しみ以外で

「別に僕は、どっちでも構わないけど。本当にFate/stay nightでいいの？」

「構わない」

「それじゃ、行く世界は決まった。後は君だね」

「君? どうこいつ意味だ? 僕に何かするのか?」

「もつ、行くんじゃないのか?」

「はあ? 今の君の力のままで、行かせたって負けるのは目に見えるだろ? それとも、君はその不安定な眼と多少の剣術だけで、どうにか出来ると思つてるのかい?」

やはり、眼のことも分かるか。流石管理者だ

「無理だな。この眼は、安定していないから最高でももつて3分だしな」

切り替えは出来るが、開眼状態は全く維持が出来ない。そして、開眼すると頭には激痛がはしる。正直に言つと、開眼何かしたくないしな

「だから、特別に君の願いを5つだけ聞いて。さあ、言つてみてくれ

願いを聞く？何かしら、5つお願いすれば力をくれるのか？なら・・・

「まず一つは、右腕を『テビルブリングガー』にしてくれ、闇魔刀と『テビルトリガーガー』発動付きでな」

「まず一つね」

「二つ目は、うちはサスケの忍術と『輪眼』、そして『輪眼の術』を全て使用可能にさせてくれ」

「はいはい。二つ目ね」

「三つ目は、頭に思い描いた武器や盾を瞬時に出せる創造という力が欲しい」

「三つ目もこいよ」

「四つ目は、飛天御剣流を使用可能にしてくれ

「次でラストだよ」

「ラストは・・・身体を治癒し、体内に巣くつ物を消し去る刀をく  
れ」

「これで全部かい?決めるなら、もつ変更は出来ないよ?」

「それで構わない」

「分かったよ。ああちなみに聖杯戦争だから、君にもサーヴァント  
一体ついでに挙げるよ」

「いいのか?其処まで力を尽して?」

「問題はないよ。ああサーヴァントは、あつちに着いたら召喚出来  
るようにしてくから、召喚したくなつたら召喚して。後力は、君が  
あつちに着いたら使えるよつてしどくから」

管理者がそう言った瞬間、また俺の目が霞んできた。遂に行くのか

見せてもらひう。第四次の戦いで、何が残ったのかを

## 彼等の残した物（後書き）

次回から原作に介入します。

ではまた次回

目が覚めたら其のままで（前書き）

今回から介入します

戦闘シーンは難しいです

## 目が覚めたら其は

「・・・此所は?」

目が覚めると、其ははさつきまでいた空間ではなく、何処の建物の中に俺は倒れていた

起き上ると、田に入った物は机に椅子 教卓 黒板

何処かの学校?に、俺はいるようだ。教室内は、暗く夕陽が若干射し込んでいる。恐らく今は夕方か?

だが今は、時刻を気にしてる暇はない。学生でもない俺が、学校?の校舎にいるのを、教師に見つかったら面倒になる

そつ思い教室?の後のドアから出た瞬間

「なー?」

「あん?」

出てすぐ右側の壁に、全身青タイツ？のような格好をした男が、此所の生徒？と思われる茶髪の生徒の胸に、槍を刺していた

「ち、まさか一日に一人も始末しなきゃならねえとはな」

槍を持った男が、生徒？に刺さっていた槍を抜き俺に構える

何でことだ。コイツは恐らくサーヴァント。クラスは恐らく、槍を持つている為ランサー

まずいな。こんな校舎の中で遭遇するとわ

「まずい！」

直ぐに左を向き走り出し、階段を降り下駄箱まで来たが

「けつこう、足速えな坊主。だが見られたからには死んでくれ」

「くつー！」

咄嗟に槍の正面からの突きを、自身の刀で弾き軌道を右に変え距離

を取る

「速い」

「少しほはやるようだな坊主。だが！」

「ちつ...」

ランサーは即座に距離を詰め、俺に突きの連撃を放つ。正面 上下 左右からくる、突きの一撃一撃を俺は皿で追い、避けれることは避け無理なものは、刀で軌道を変え反らす

「何だ？ 攻撃してこねえのか坊主？」

話ながらも、ランサーは攻撃の速度は緩めない

「残念ながら、お前が攻撃を止めない限りそれは無理だな」

迫りくる突きを、反らしながらランサーに詰つ

「やつかよ」

「さつ！」

突きのスピードが上がり、頬をかすった

「悪いが、個々からは本氣で行かせてもいいはず

「くつ！だが！」

スピードが上がり、些か同様したが何とか田で追い、また同じことをする。回避し軌道を反らし続ける

このままでは、埒があかない。だが、だからと書いて仕掛ける訳には・・・

「苦戦してるとようだね」

頭に声が、奴か

「ああ、返事はしなくていいよ。もう君には力は与えた。忍術も写輪眼も、口か心の中で言えば使用可能だから。後のことば落ち着いた時に伝えるよ。じゃ」

もつと早く言えよ。まあいい。・・・やつてみるか

刀を鞘に收め、ランサーに真つ正面から突撃し

「漸く、反撃する気になつたか！」

再度俺に向けてきた正面からの突きを、回転し避け

「飛天御剣流 龍巻閃・旋！」

ランサーの身体から、血が飛び散る

「何ー？」

突きを利用し、カウンターでランサーに抜刀し、左腹部から右の胸板までを斜めに斬り裂き、再度距離を取る

「傷が浅い」

恐らく咄嗟に身体を後ろに下げる、斬撃をダメージを減らしたのだ  
ろ？

「驚いたぜ。まさか、カウンターで斬られるとはな」

「咄嗟に後ろに下がって、ダメージを減らしたアンタに俺は驚きだ  
よ」

「は、言つてくれるじゃねえか。だが、また誰かに見られても面倒だ。我が必殺の一撃で終わらせる」

ランサーは再び槍を構える。何だ!? 槍から凄い何かを感じる。これはまさか宝具を使う気か!

「写輪眼!」

宝具に備え、写輪眼を使い構える。避けれる宝具なら、回避し奴を仕留める。万が一に備え、ある術を心の中で言い発動する

「貴様の心臓、貰い受ける!」

「やつてみろ! 必ず避けてやる!」

「ふつ、刺し穿つ死棘の槍!」  
〔ゲイボルク〕

「！？」

槍を回避しようとしたが、槍の攻撃を田で見る前に、ランサーの槍が俺の胸を貫いた

馬鹿な！『輪眼でも見切れないと！』

「な・・に。馬鹿・・・な」

俺は口から、血を吐きその場に倒れた

ランサー side

「漸く、仕留められたぜ」

俺は今槍を、坊主の胸から引き抜き坊主を見る

この坊主、人間にしては中々だったな。この俺の槍を回避し続け、逆にカウンターでこの俺を斬る何てな

だが今度ばかりは、俺の宝具をまとめて「喰らったんだ。生きていねえだろ

「俺とあっちまつとは、運がなかつたな坊主」

「確かに、こんな所で会つのは予想外だつたよ」

「何！？」

俺は、後ろから声が聞こえ振り返つた。其所には、さつき俺のゲイボルクを喰らつた筈の坊主が立つていた

ランサー side out

「馬鹿な！確かに、ゲイボルクはお前に直撃した筈ー！」

かなり驚いてるな。だが確かに、今のはまともに喰らつたら死んでいた

「確かに、アンタの槍は俺を貫いた。しかし、俺は生きている。種

明かしはできないがな。解「

写輪眼の究極の幻術イザナギ。不利な事象を夢にし、有利な事象を現実にする。さつきの状態では、槍が心臓を貫くのが夢になり、貫かなかつたのが現実となつたのか？この術は、よく分からんがまあいいか

「まだやるか？なら出来れば、人目に付かない場所で殺りたいんだが」

「俺のほうもまだ、殺り合いたいが残念ながら、帰還しろとの命令が出た」

ランサーは、俺に背中を向けそうと言つ

「そうか」

「お前名は？」

「夜月・・・夜月彩雅だ」

「なら覚えとけ彩雅。貴様の心臓俺が貰い受けん！それと、隠して

んのか知らねえがその眼と腕バレバレだぜ

そう言つと、ランサーはその場から消えた

「どうにかなつたか。だが・・・バレバレか。先ずは此所から離れ  
よう

「待つてくれ！」

外に出ようとしたら、先程見た茶髪の生徒？が此方に走ってきた

「何だ？」

「てお前、彩雅！」

は？何でコイツ俺の名を知つてゐる？

「お前は誰だ？何で俺の名を知つてゐる？..」

「何言つてんだよ。お前、俺と同じクラスじゃないか」

同じクラス？既にそういう設定に俺はなつてゐるのか？

でも、服装が学生服じゃねないのに何とも思わないのか？

そう思い、今の衣服を確認すると俺の格好は、目の前の奴と同じ学生服になつていた

（どうなつてゐる？）

まあそのことは、後で奴が教えてくれるだらう

といひでコイツ、見覚えがあるな。・・・まさかコイツが

「・・・お前、衛宮士郎か？」

「何言つてゐんだ？当たり前だろ」

「コイツが、衛宮切嗣が唯一救えた少年か。でかくなつたな。まあ、第四次から10年ぐらい経つてゐるから当然か

まさかこんなに早く、会えるとは思わなかつたが

「そんなことより、わしきの奴は何なんだ！？何でお前は、アイツと戦つてたんだ！？」

今コイツに、余計なことは言わないほうがいいな

「奴が何なのかは知らん。戦つたのも自衛の為だ。戦わなければ殺されてたからな」

「そうか。・・・やつぱり彩雅も知らないのか」

「ところで、何でお前は生きてる？」

確かにランサーの槍は、衛宮の心臓に刺さつていた筈。なのに何故衛宮は生きている？

「見てたのか俺が刺されるとこみを。それが、俺にも分からないんだ。気が付いたら傷が塞がつてて」

目を見る限り、嘘ではないようだな。まさか zero のアイリストアーリーのように、衛宮の体内に全ては遠い理想郷を埋め込んであるのか？

衛宮切嗣のことだ、あり得なくはないだろ

体内に、全ては遠い理想郷アヴァンロードがあるのならセイバーがいれば、確認出来るのだが

確信するまでは、このことは衛宮には黙つておこう

「とりあえず、送つてやるよ。またアイツが来るかもしれないからな」

「ああ悪いな彩雅」

「気にするな。じゃあ行くぞ」

俺は衛宮と一緒に、学校から出て衛宮邸に向かった

目が覚めたら其は（後書き）

次回は衛宮邸での話です

では次回も宜しくお願ひします

## 衛宮邸での戦い（前書き）

題名の通り衛宮邸で戦います

では宜しくお願いします

## 衛宮邸での戦い

「ありがとうございます。送ってくれて」

現在俺は、衛宮と共に衛宮邸に帰還した。特に襲撃などもなく、無事に帰還出来た

「気にするな。クラスメートが、また殺されかけたらシャレにならんからな」

「や、そうだな。よかつたら上がつてかないか? お茶べらりい出されど」

「なら、御言葉に甘えてお邪魔させてもらひ

「ああ、どうぞ」

衛宮と一緒に、衛宮邸に内に入る

本当は、一応室内まで行つて安全か確認の為何だがな

それにしてでもかい家だ。切嗣はいい家に住んでたんだな。俺も何時か、こんな武家屋敷に住んでみたいぜ

居間に案内され、座つて待つていると衛宮がお茶の乗つた盆を持ってきた

「どうせなら、家で飯も食べてくか？」

お茶を田の前に置き、衛宮が聞いてきた

「お前がいいんなら、また御言葉に甘えさせてもらひつよ

素直に、人の厚意は受け取つておいつ

「悪いが、ちよつとトイレ貸してくれないか？」

お茶を飲み、一息ついたところでトイレに行きたくなつた

「いいや。トイレは……」

衛宮からトイレの場所を聞いて、俺は居間を出てトイレに向かった

数分後、トイレから出て居間に戻つてみると衛宮の姿がなく

「よう、また会ったな彩雅」

「俺が、いない間に襲撃かランサー？」

ランサーが、外の庭に立つていた

「お前俺が何か知ってるようだな。もしかするとお前が七人目か？」

七人目？マスターの話か？ランサーの言葉から察すると、まだ七人揃っていないのか？

「俺が魔術師に見えるか？」

「見えねえな」

「ところで、もう一人茶髪の奴がいたろ？何処にいる？」

「坊主なら、あつむの土蔵にぶつ飛ばしたぜ」

ランサーが顎で示す先に、扉が壊れた土蔵があつた。まだ殺されてはいないうだな

「当然、俺も殺す氣何だろ?」

「見られたからにはな。それに、俺のことを知ってるんなら尚更だ  
!」

「ならば、お前を倒す!」

同時に飛び出し、俺の刀とランサーの槍がぶつかった

「飛べー!」

その数秒後、左腕で槍を掴みランサーと投げ飛ばした

「それが、隠してたてめえの左腕の正体か?」

ランサーは、何事もなかつたように着地し俺の左腕を見る

「ああ、どうも腕が疼くんで解放した」

左腕は現在、悪魔の腕「デビルプリンガー」になつていて。凄い腕力だな。サーヴァントを武器」と投げ飛ばすとは、本来の俺の腕力の数倍はあるだろ？

「隠してる時と今じゃ、発してる魔力が桁違いみてえだな」

「当然だ。魔力を抑えて普通の腕にしてるんだからな」

ランサーに言つた後、瞬時にランサーの目の前に接近し

「飛天御剣流 龍翔閃！」

飛び上がりながら、斬り上げをランサーに放つたが

「甘めえぜー！」

だがランサーは、斬り上げを身体を右に反らし回避した

「飛天御剣流 龍槌閃！」

だが俺は、その後上空で落下を利用した剣撃をランサーに続けて放つた

「ちつー。」

ランサーは、槍を横に構え盾にし斬撃を防ぎ、槍の横屈ぎで俺を弾き飛ばした

「やはり、右腕では力が足りない」

「敵を目の前に、余所見とは余裕じゃねえか！」

「余裕の訳がないだろー。」

刀を左腕に持ち、目の前のランサーの槍の一撃を弾き、蹴りを見舞うが槍で防がれた

「最初やつた時より力が全然違えな。その腕の力か？」

「俺が言つと思うか？」

再度くる槍の一撃一撃を、俺の斬撃で相殺しながら答える。それでも【デビルプリンガー】凄い力だ。通常の俺の力では、軌道を反らすだけで精一杯なのにな

「二のまじきやさしきと同じだな。一度田だが、我が必殺の一撃で

「なら、お前にも喰らわせてやるよー!必殺の一撃をー!」

右手にゲイボルクを作り出し、刀を鞘に納め構える

「てめえ・・・何故俺のゲイボルクを持つてやがるー!?

「教える訳がないだろ。・・・先に言つておくが、このゲイボルクは本物だからな。ケルト神話の光の皇子 クーフーリン

「俺の真名まで・・・面白れえー!ビッちのゲイボルクが勝つか、勝負と行こうじやねえか!」

ランサーも再度俺に構える

「いいだろ。・・・行くぞー。」

「刺し穿つ（ゲイ）」

「死棘の」

しかし真名開放の直前

「「ー?」」

俺とランサーは何かを感じ、同時に土蔵を見た

土蔵の中を見ると、中は赤い光で包まれていた

衛宮 side

さつきの、槍の男に蹴り飛ばされて土蔵に吹っ飛ばされ、絶対絶命  
だと思い扉の外を見たら、彩雅が戻ってきた

彩雅に、逃げると言おうとしたが奴が槍の男と、戦い初めて何も言  
えなくなつた

何だ？彩雅のあのスピードは？普通なら、避けることが出来ない槍を彩雅は自分の刀とぶつけた

更に驚いたのは奴の左腕。今日会った時、何か変だと思っていたが奴の左腕が突如、人の腕ではなくなり全く別の腕になつた

何だあの腕は？それに発して魔力が、さつきとは違い遙かに異常になつてゐる

そしてまた戦闘が始まつた。彩雅はあの槍の男と、互角に渡り合つてゐる

俺は手も足も出ず、土蔵に吹つ飛ばされた。正義の味方を目指す俺が、殺されかけて守られている

俺は自分に苛立ちを覚えた。だがそう考へてゐる時、床に書いてあつた魔法陣が赤く光り出した

「な、何だ！？」

目の前が光りに包まれ、目を開けると

「問おう。貴方が私のマスターか？」

目の前には、青い鎧を着た少女が立っていた

「ますたー？」

何のことが分からず聞き返す。すると彼女は俺の手の甲を見て

「サーヴァント セイバー召喚に応じ参上した。私の剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私とともににある。ここに契約は完了した」

そう言われるが、状況をうまく飲み込めない

「マスター？ サーヴァント？」

「はい、その令呪が私のマスターである何よりの証拠。・・・マスター、表にサーヴァントの気配を感じます。マスターはここに」

セイバーはそう言い、土蔵の外に向かおうとする

「待て！何をする気なんだ？」

「敵を討つのです。マスター、この聖杯戦争必ず私がマスターを勝利に導きます！」

セイバーはそう言つと、土蔵の外に出て行つた。俺も少し考えた後土蔵を出た

衛宮 side out

数秒後、土蔵の中の光が消えた。何だ今の光は？

「まさか、あの坊主が七人目のマスターだと…？」

七人目？衛宮が最後のマスターだったのか！？ならさつきのは、サー・ヴァントが召喚されたのか？

そして突如土蔵の中から、青い何かが俺とランサーを攻撃をしてきた

「ちつー！」

「危ないな」

ランサーは槍で防ぎ、俺は後方に避け回避し前を見ると

「何！」

俺は目を疑った。目の前にいるサーヴァントを見て

（第四次のセイバーだと？同じサーヴァントが召喚されたのか？）

目の前にいるのは、確かに第四次のサーヴァント セイバー。確かに  
真名はアルトリア・ペンドラゴンだったか？

（これも何かの因縁なのか？）

セイバーは俺を無視し、ランサーと戦闘を開始した

「ぐ、不可視の武器か？だが貴様のその武器は剣だな？」

ランサーが、セイバーの横蹴りを槍で防ぐが吹き飛ばされセイバー

に問う

「さあどうだろうな。双剣かもしれぬし斧剣かもしれぬし、以外に弓かもしれぬぞ？」

いや、弓振り回して槍持つた男を吹き飛ばす何て、出来る奴いるのか？

「は、言つてくれるぜ。今回の聖杯戦争、いけすかねえマスターにしみつたれた偵察任務。ハズレを引いたと諦めかけてたが、最優と名高い剣使いのサーヴァント セイバーが相手に出来ると、俺も案外運が出てきたかもな！」

ランサーはそう言つと、セイバーと槍を交える。セイバーと戦うのが運がいいとは、コイツも俺と同じで強い奴と真っ向勝負がしたいって奴か？

「流石は槍兵のサーヴァント。凄まじい槍捌きですね」

セイバーはそう言ひながらも、槍の突きを防ぎランサーと同じスピードで、不可視の剣を振る。ランサーも、不可視の剣による一撃を回避し距離を取った

「やるじゃねえかセイバー。・・・この槍に掛けて貴様を討つぜー。」

ランサーが構えると槍に魔力が集中する。あれは・・・宝具を使う気が？

対するセイバーも、槍を避け迎撃しようと構える

「貴様の心臓貰い受けろー！喰らえ。突き穿つ死翔の槍」ゲイボルク

ゲイボルクは目の前で放たれ、セイバーに直撃した。しかし

「く、う」

「何ー交わしたと言うのかー!? 我が必殺のゲイボルクをー!？」

確かにゲイボルクは、セイバーの胸に直撃したが致命傷は避けていた

あんなのが避けれるもんなのか?やはりサー・ヴァント、流石だな。  
俺には絶対真似できない

「ゲイボルク? それが貴方の宝具の名? なら貴方の真名は」

「ち、まずつたぜ。まさか一日で一人に宝具を避けられ、真名がばれるとはな

そつ言いつランサーは、背を向け塀の上に飛び乗った

「逃げるのですか？」

「生憎、マスターから帰還しろと言われてな。追つてくるなら命を捨てる覚悟で来な。・・・彩雅、お前の心臓次こそ貰い受けのからな！」

セイバーと俺に伝えると、ランサーは消えた。その数秒後セイバーが俺のほうを見て構える

「俺は敵じゃない。・・・剣を納めてくれないか？」

「貴方のその腕と眼は、マスターのしうがないになるかもしれません。それに、どのような手を使ったのか知りませんが、他人の宝具を作り出す力は危険です。障害になる前に貴方を射ちます！」

セイバーが俺に向かい、不可視の剣を振るつ

「重い！」

ゲイボルクで、剣の軌道を左に反らし後ろに下がる

「マジで殺す気か？なら俺も容赦しない！」

ゲイボルクを構え、真名開放をしようとした時

「待てセイバー！」

土蔵の中から衛宮が出てきた

「何故ですかマスター？この男は危険です。障害になる前に射つのが賢明です」

確かに俺は端から見れば、よく分からぬ奴だが其処まで言わなく  
てもいいだろ？

「駄目だセイバー。彩雅は俺を助けてくれたんだ。そんな奴を殺さ  
せれるかよ！」

「・・・分かりました。マスターが其処まで言つのなら」

セイバーは剣を納めてくれた。俺も腕を元に戻し、ゲイボルクを地面に落とすと数分で消えていた

「サイガと言いましてね。先程の、ランサーの宝具はどうしたのです?」

「使わないから消したんだよ」

本当は、何で消えたのか分からぬ為そう言つておく

「マスター、堀の向こう側から別のサーヴァントの気配を感じます。マスターは此所に!」

そう言つと、セイバーは堀を飛び越え行ってしまった

(おかしい。致命傷ではないにしろ、ゲイボルクでダメージは与えられてた筈。なのに、衛宮が近くに来たら傷は治癒されてた。・・・やはり衛宮の体内には、全ては遠い理想郷アヴァロスがあるかもしれない)

「彩雅！セイバーを追ついでー！」

「あ、ああ」

衛宮に呼ばれたので、考えるのをやめてセイバーの後を追うと、セイバーは白髪の男と戦っていた。更にその後ろには、ツインテールの女の子が一人いる

「ほつ、遠坂凜がマスターか」

白髪の後ろにいたのは、成長した遠坂凜のようだ

「やめろセイバー！」

衛宮の左手が光り、セイバーが攻撃を止め止まつた。まさか令呪を使つて止めたのか？

「何故ですマスター？田の前に敵がいるといつのこと、令呪を使って止めるなど」

「まだ俺は、そいつが敵なのか確めていない。そうだとしても殺す

「甘ちやんだな。まあ聖杯戦争のことを知らないのでは無理ないか？」

「随分甘いのね。敵を前にして」

「その声遠坂か！？」

「今晩は衛宮君。・・・それと夜月君」

「ご丁寧に俺にも挨拶してくれた。しかし何故か、白髪の男がせつきからずつと俺を睨んでいる。まあ無視しておこう

「何で遠坂が此所にいるんだ！？」

「サーヴァントの氣配と、それとは違つ魔力を感じたからよ

遠坂は衛宮にそう呟くと今度は俺を見る

「夜月君ははじめて此所に？」

「衛宮と一緒に帰ったからだが」

「そう、まあいいわ。衛宮君まさか貴方が魔術師だった何でね」

「遠坂も魔術師なのか？それとサーヴァントとか、マスターって何なんだ？教えてくれ」

「衛宮君、貴方も知らないの…？？？いいわ教えてあげる聖杯戦争について」

「本気か凛？」

「何も知らない相手を倒しても意味ないでしょ？」

まあ確かにフロアじゃないな

「全く君は」

白髪はやつぱりと、田の前から消えた

「マスター彼女の説明を聞いたほうがいい。マスターは情報を知らなすぎる。これから戦いの為にも、聞いたほうがいいでしょう」

「分かった。じゃあどうあえず皆家に入つて話そいつ

「分かったわ。・・・夜月君、貴方も来てもらわね

「了解

俺達はひとまず、衛宮邸に入り説明を聞くことになった

## 衛西邸での戦い（後書き）

次回は説明と教会に向かうといひまでだと思こます

では次回も宜しくお願いします

## 教会での会話（前書き）

教会での神父との会話です。  
では直しくお願いします。

## 教会での会話

「・・・聖杯戦争。魔術師通しの殺し合い。今町で、そんなことが始まつとしてた何て！」

衛宮邸に入り遠坂は、俺と衛宮に聖杯戦争やマスター、令呪について説明してくれた

衛宮は、真剣に聞いているようだが俺は聖杯戦争やサーヴァントが何なのか知っている為ほとんど聞いていなかつたが

「衛宮君はマスターだから、聖杯戦争に参加は確定ね。貴方はどうするの夜月君？」

「どうするとは、どうつ意味だ？」

「今聖杯戦争の話を聞いて、夜月君はどうする気？」

「どうもしない。戦闘になるなら、自衛の為に戦う。それだけだ」

本当は、全員倒してやるみたいなどを言いたいが止めておこう

「魔術師でもない夜月君が、サーヴァントをどうにか出来ると思つてるの？」

「ランサーと一緒に戦闘をし、一回宝具を喰らつたが生きていると俺が言つてもどう思つつか？」

「…」

全員驚いてるようだな。まあ只の人間が、サーヴァントと戦い宝具まで喰らつて、生きていると知つたら当然か

「…・その左腕の力かしら?」

遠坂が左腕を凝視している。魔力はランサー戦の後、かなり抑えてるんだが気付かれるか

「さあな。場合によつては、敵になるかもしねいんだ。自分の手の内を言つと思つか?」

「思わないわ。貴方は衛宮君と違つて、お人好しじゃなさそだか

「ひ

「まあお前と白髪が、俺に仕掛けてこなければ俺は何もしないよ」

「だがさつきから田に見えないが、白髪が俺を睨んでるよ」

「どうやら俺を警戒してるようだな。・・・まさかイレギュラーだとバレたか?一応俺も警戒をしておいつ

「分かつてゐるわ。私も関係ない人間を巻き込む気はないから」

「衛宮、お前もだ。さつきのセイバーの件は許してやるが、次に攻撃されたらお前相手でも容赦はしない」

「分かつてゐる。セイバー彩雅に攻撃するなよ」

「これとか納得いきませんが、分かりました」

「とりあえず当分は、コイツ等と一緒に戦うとしよう。問題は白髪だな。まあどうするか、ぼちぼち考えていい」

「じゃあ聖杯戦争について、分かつたところで行きましょう」<sup>1</sup>衛宮君

「行くつて何処に？」

「聖杯戦争の監督役のところよ」

監督役か。前回は確かに言峰の親父だったが今回は誰何だ？

「監督役？ そんなのがいるのか？」

「ええ、かなり嫌な奴だけビ。夜月君はビツする？ 一緒に来る？」

「・・・一人になつたら、狙われるだろ？ から俺も行いつ

俺がそう告げた後、全員衛宮邸を後にした

「なあ彩雅、そんなに間をあけて歩かなくともいいんじゃ」

「お前等と一緒にされたくないからだ」

現在監督役の所へ向かっているが、俺は衛宮達から10ほど離れて歩いてる。その理由は

「マスター、幾ら何でもこのよつたな格好は・・・」

セイバーは靈体化出来ないらしく、鎧の上に黃色の雨ガッパを着る  
といつ、不自然な格好をしている

雨も降つてないのに、雨ガッパ何か着てる奴と一緒に歩いてたら、  
人目が気になる為俺は距離をあけて歩いているのである

そう言えば、zeroでもセイバーって靈体化してたか？記憶には  
いが、まあいか別に俺のサーヴァントじゃないし

「苦労するわね。未熟な魔術師と契約しちゃったばかりに

遠坂が、哀れむようにセイバーに告げる。実際今のセイバーって、  
zeroより弱いんじゃないか？衛宮はまだ未熟な為、恐らく魔力  
が足りない。下手したら、約束された勝利の剣使つたら魔力切れ  
倒れるんじゃないか？いや最悪、第四次のバーサーカーみたいに自  
滅するんじゃ？

「着いたわ。此所が監督役がいる言峰教会よ」

セイバーのことを考えていると、目的地の言峰教会に着いたようだ。  
・・・待て言峰教会だと?なら今回の監督役は奴か?

「さあ、行きましょう衛宮君。夜月君はどこにあるの?」

「・・・俺も行こう

奴がどうなったのか、見てみたいからな

「セイバーはどこにある?」

「私は此所で敵に備えます。気をつけて下さこマスター」

「凛、私も此所で待とつ」

靈体化を解除した白髪が、凛にそつ告げた

「分かったわ。アーチャー」

白髪のクラスはアーチャーね。あれ?セイバーと戦つてた時、双剣使つてたような気がしたが

「じゃあ行くわよ」

遠坂と一緒に、俺と衛宮は言峰教会に入った

「その監督役の男は、信用出来るのか？」

「一応」の神父とは、古い付き合いだから大丈夫の筈よ」

やはり遠坂は、言峰が父親の時臣を殺したということを知らないようだな。更に、母親の遠坂葵が壊れちまたのも、言峰のせいだと知らないんだな

だが、今伝えるべきではないな。余計な混乱を生むだらうし、俺の正体に気付かれても面倒だ

「このよろな夜更けに何用だ凜？まさかお前が最初の脱落者か？」

教会の扉を開くといた。薄ら笑いながら奴は其所にいた

「違うわよ。七人目のマスターを連れてきたのよ

「ほう。君か七人目のマスターは？」

言峰が俺を見ながら言つ。・・・何だ？実際会つてみると、この男かなり気にくわない。俺の心を見透かしているような目。俺を嘲笑うかのような目

「違う。七人目は「イイツだ

苛つきを抑え、衛宮を指差して言峰に告げる

「そうか、それはすまなかつた。君の左腕から魔力を感じたものでな」

また薄ら笑い俺を見る。凄まじいほど「イイツ」と喋ると不愉快だ

「私はこの聖杯戦争監督役の、言峰綺礼だ。少年君の名は？」

「衛宮士郎」

「衛宮士郎。ふつそつか

その後、何か衛宮に言つてゐるようだつたが、俺は教会内を見回してた為聞いてなかつた

中は思つたより綺麗だ。だが何だ？この教会内から、かなりの血の臭いがする。一人や二人じゃない。かなりの数と思われる人間の血の臭いが

まるで目を瞑つたら、戦場の真つ只中にいるような感じになるくらいだ

人殺しの仕事何かしてなきや、気付かなかつただろう

「それでは、衛宮士郎を最後のマスターと認めよう。ここに聖杯戦争の開幕を宣言する。各自、己の信念に従い存分に競い合いたまえ」

話が終わったのか、言峰がそう宣言する声で俺は思考世界から戻つて來た

「それじゃあ、ここはもう用はないわね。行くわよ衛宮くんに夜月君」

「あ、ああ

「・・・・

遠坂が衛宮を連れて、出て行こうとする

「喜べ、少年君の願いはよづやく叶つ

言峰が、出て行く衛宮にそう告げる。衛宮は一瞬振り返り言峰を見て扉が閉まった

「皮肉なものだ。誰かを救いたいと思う願いは、同時にそれを行つて扉が閉まつた  
悪の存在が必要なのだからな」

コイツ、衛宮の何かに気がついたのか？

「悪の存在。そんな者がいなくても人は救えるだろ？」

「何、彼のように純粹に人を救いたいと願うのなら、悪の存在が人を苦しめればその願いは容易く叶う

「

薄ら笑いながら俺に言峰は告げる。笑いながら、言つ言葉じゃないだろ？」

「さて、君はどうする？ 一般人である君も、彼等と共に聖杯戦争に参加するのかね？」

「聖杯戦争何かに興味はない。だが・・・アンタはまつとうな監督役なのか？」

「まつとうとは、どういふ意味かね？」

「親父みたいな奴じゃないのかと、言えれば分かるか？」

「・・・少年よ。何故君が私の父を知っている？」

さつきと感じが変わった。明らかに殺氣を感じる

「自分で考える。・・・それと質問に答えてくれ。アンタは親父と違つて、まつとうな監督役なのか？」

「当然だ。私は公平にこの聖杯戦争を監督する」

全く信用出来ねえな。コイツが過去に何をやったのかを知つてると

「さうか」

そう言峰に言つと、俺も扉に向かう

「少年よ。名はな?」

言峰は、俺が扉を開く直前に俺に聞いてきた

「夜月彩雅」

「では夜月彩雅、君は一体何者だ?」

「俺はただの人間だ。・・・まあアンタ以上に、今回の聖杯もまつとうな物か分からぬがな」

この男と会つて、分かつたことがいくつもある。一つは、今回の聖杯戦争もまつとうな戦いには、ならないということ。二つ目は監督役の言峰が、必ず何か暗躍をすること。最後は、あの男は完全に悪しか好めない自分を受け入れたということだな

もう一度言峰を見て、俺は扉を閉め外に出た

「遅かつたな彩雅」

「悪い待たせた」

「衛宮達と合流し教会を出ると

「セイバー、俺はこの戦いを見過せない。だから俺は、マスターになる事を受け入れた」

「どうやら、覚悟は教会内で出来たようだな

「それではー」

「ああ、色々と頼りないマスターだけどようしく頼む

「衛宮はセイバーに手を差し伸べ、セイバーもその手を取った

「はい、マスター」

「そのマスターってのは、やめてくれないか?俺のことは土郎って

呼んでくれ

「はいシロウ、あー」の呼び方は実に好ましい

好ましいねえ。別に何も変わらない気がするんだがな

「とりあえず帰るだ。嫌な予感がするからな」

何だ？ さっきから身震いがする。恐怖？ いや武者震いか？ とにかく何かがある気がする

「じゃあ私は此所で。次に会う時はお互い敵同士よ」

遠坂が、俺達の別方向を歩き俺達に会つ

「俺は遠坂と戦つつもりはないって」

「呆れた。まだそんなこと言つとは思わなかつたわ

「腹をくぐれ衛宮、これは殺し合い何だからよ」

「それでもやつぱり・・・」

これは、予想以上の甘ちゃんだな。衛宮切嗣よりも、手におえないかもしけないな

「衛宮君にそのつもりは無くても、私のことは次に会つたら人間だと思わないほうがいいわよ」

人間だと思わないほうがいいか。俺は人間という生き物は、人の皮をかぶつた化け物だと思つてゐるが

「ねえ？お話はまだ終わらないの？」

「「「「...?」「」」

俺達の後ろから声がし振り返ると、其所には銀髪の長い髪に赤い瞳の少女と、腰以外裸で強靭な肉体をしたでかい男が立つていた

## 教会での会話（後書き）

次回は狂戦士との戦闘です。

ではまた次回も宜しくお願ひします。

## ホムンクルスと狂戦士（前書き）

狂戦士との戦闘です

では直しくお願いします

## ホムンクルスと狂戦士

あの銀髪の少女、俺の記憶が正しければイリヤスフィール・フォン・アインツベルンか。またも懲りずに、アインツベルンはマスターを送り込んだようだな。確かアイリスフィールが、前回体内に聖杯を内蔵していたな。なら今回は、イリヤスフィールの体内に聖杯はあるのかな？

「やばい。アイツ桁違いだわ」

遠坂が大男を見ながら呟く。・・・ずっと感じてた身震いは、アイツがいたからか

だが確かに、アイツは見た目だけじゃなく、雰囲気や気配でもやばい感じがするな

「初めましてお兄ちゃん。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。じつちがサーヴァントのバーサーカー」

やはりバーサーカーか。なら奴の持つている、あの石で出来た斧剣が宝具か？試しに創り出し、情報を引き出してみるか？・・・待て、あんな全てが石で出来た斧剣など、俺何かが持てるとは思えない。創造は止めておこう

それに武器が宝具とは限らん。もしかしたら、常時開放型の宝具かもしれない。何れにせよ、注意を怠らないようにしなければ

「aignzベルンーそれって御三家の」

「遠坂、aignzベルンって何なんだー！？」

「聖杯入手を宿願として、毎回聖杯戦争にマスターを送り込んでる奴等よ」

「確か俺の記憶では、前回と前々回にも聖杯戦争に参加してたな

「何で君のよつな子供が、殺し合ひ何かに参加してるんだー！？」

「リンが言つたでしょ。aignzベルンの宿願の為よ。・・・それとお兄ちゃんを殺す為」

「衛宮を殺す為？」この娘はどうやら、衛宮個人に怨みがあるようだな

恐らくaignzベルンに、衛宮切嗣はお前とアイリスフィールを捨て、aignzベルンを裏切ったとでも言われたからだろう

まあ衛宮に付きつきで、彼女の所へ行かなかつた衛宮切嗣にも責任はあるな

「ところで、隣のお兄さんは誰？見たところ一般人みたいだけど」

「お初にプリンセス。自分の名前は夜月彩雅。以後お見知りおきを」  
一礼しながら、自身の名前を告げる。どうやら、名前何か直ぐにバレるだらうしな

「（）寧にありがとう。でも、ただの一般人じゃないよねサイガ？」

イリヤスフィールは、俺の左腕を見ながら告げる。やっぱりバレたか

「一般人だろ？と、どっちにしろ殺す気だろ？」

「うん、勿論」

笑顔で頷いてきた。普通子供に殺す気か？って聞いて、子供が笑顔で頷いちゃいけないだろ

まあ殺す気か？何て聞くのも間違つてるか。だが殺される訳にはいかんのだよ！

「悪いが、死ぬ訳にはいかん」

右手に靈子を集中させ、それを矢にして放つ特殊形状の弓、ヤク銀嶺弧雀ギンレイゴジを創り出し飛翔し構える

「喰らえ光の雨」  
リビト・レーク

上空からバーサーカーに向け、銀嶺弧雀から無数の矢を一斉に放つた

「！」

バーサーカーは咆哮をし、矢を斧剣で弾き出しが数が多く全てを弾けず、地面にも何十何百の矢が刺さりコンクリートが割れ、姿が見えなくなるほど砂塵がまつた

「彩雅、いきなり攻撃何て卑怯だろ！」

地面に着地すると、衛宮が俺にそう告げる

「「これは殺し合いだ。それに相手が相手だ、そんなことを言つてゐる場合ではない」

「だからつてー。」

「やめなさい衛宮君！夜月君の言つてることが正しいわ。これは殺し合つてなのよ」

「無駄だリン。この界には何を言つても無意味だ」

「何だとー。」

「アーチャーーー。シロウを侮辱する気ですかーーー？」

「五月蠅い奴等だ。戦闘中だとこいつのこと

「お前等戦闘中だ。それにあの程度でバーサーカーは倒せん」

「よく分かつてゐるねサイガ」

イリヤスフィールが、笑いながら俺に告げる。やはり死んでいないか。バーサーカーめ、理性を失つてもイリヤスフィールを守つたようだな

砂塵がはれ、バーサーカーのいた場所を見ると

「な！ あれだけの攻撃を喰らつて無傷つて！？」

其所には、無傷で立つてゐるバーサーカーとイリヤスフィールの姿があつた。まさか光の雨リビット・レーベンをまともに喰らつて無傷とわ予想外だ

「・・・・」

再度バーサーカーに数百発の矢を射るが、矢はバーサーカーの斧剣に弾かれ、更には身体に当たつた矢は粉々に砕けていた

恐らく、一定の威力の攻撃以外は通用しないのだろう

「無駄よ。バーサーカーにそんな数だけの矢何て喰らわないわ

「矢が喰らわないのなら！」

セイバーがバーサーカーに接近した

「！」

咆哮しながら斧剣と不可視の剣がぶつかった

「くう」

しかしセイバーは、力負けし俺の所に吹っ飛ばされた

「大丈夫かセイバー？」

「はい。私は問題ありませんサイガ」

セイバーを受け止め尋ねてみたが、吹っ飛ばされただけで大丈夫そうだ

「！！」

バーサーカーは、咆哮しながら俺達に向かってきた

「シロウコは、指一本触れさせませんー！」

再びセイバーが、バーサーカーに向かつて行った

「アーチャー！」

「分かっている。夜月彩雅、貴様も弓が使えるならセイバーを援護しろー！」

銀嶺弧雀を衛宮に渡しながら告げる

「生憎、弓は余り使わねえんだよ。衛宮、俺はセイバーと一緒に斬り込む。お前はこの銀嶺弧雀で、俺とセイバーを援護してくれー！」

「お前、あんな奴を相手に接近戦する気か！？死ぬ気かなのか！？」

「衛宮君の言つ通りよ。死にたくないならやめときなさい夜月君

「リンの言つ通りだ。君は私と共にセイバーの援護に徹しろー！」

三人は俺を止めるが、俺は止まる気はない

「悪いが死など怖くないんでな。行かせてもらう。援護は任せたア  
ーチャーと衛宮に遠坂」

左手に、自身の刀を抜きそう三人に告げると、俺はセイバーの元へ  
向かつた

「！」

「危ねえな」

俺に振るわれた斬撃を避けたが、これはまともに打ち合つたらまず  
勝てんな

「サイガ！何故来たのです！？」

「お前を援護する為だ」

「しかし、人間の貴方では無理です！」

確かに普通の人間なら無理だな。だが俺は普通じゃない

「心配は無用だ。それにそんなこと言つてる暇はない。セイバー協力して奴を仕留めるぞ」

「分かりました。ですが無理はしないでくださいサイガ」

「分かっている。喰らえ火遁・豪火球の術」

向かってくるバーサーカーに、等身大ほどの火の球を発射しバーサーカーに当たつた瞬間爆発したが

「！」

バーサーカーは豪火球を喰らつても、ビクともせず向かってきた

「ち！」

斧剣の横廻ぎを刀で受け、身体をしゃがませ受けながすと後ろからは、矢の雨と魔力弾がバーサーカーに炸裂し、セイバーがその隙に接近し、バーサーカーは斧剣を振るつたが

「火遁・豪火球の術！」

斬撃を、豪火球と衛宮達の矢の雨で無理やり、軌道を反らしてやり  
斧剣は空を斬り

「ハアアアア！」

セイバーが、不可視の剣を身体に振るつたのだが

「何！」

しかしセイバーの剣は、バーサーカーの身体に弾かれた。またセイ  
バーは、斧剣で攻撃をされ防いでいるがあのままでは

「！」

「ちい！」

バーサーカーに向かつていったが、攻撃され奴の斬撃に反応したが  
ガードに使つた刀が、斬撃で弾き飛ばされてしまった

「！」

「くそ！」

「サイガ！」

後ろに、セイバーと共に下がり合流する

「規格外過ぎるだろ」

「当たり前よ。バーサーカーはギリシャ神話の大英雄ヘラクレス何だから」  
何だとヘラクレスだと！？

「サーヴァントとは、英雄の魂を現世に呼び出した者。それくらいは知ってるわよね？靈体である彼らの存在は、そこに住む人々の認知度に強く影響されるわ。ゆえに、広くこの世に知れわたった英雄ほど強力になる。だからヘラクレスに勝てる者何ているわけない。バーサーカーにとつて、セイバーにアーチャーそしてサイガ、貴方達何てただの雑魚と一緒によ」

「ただの雑魚ねえ」

イリヤスフィールを見ながらそつ吐く。侮つてもうつては困るな

「サイガ下がつてください。剣の無い貴方がいても足手まといです」

「セイバーの言つ通りよ。下がりなさい夜月君」

「それは聞けんな、それに下がるのはお前だセイバー」

左手に剣を創り出し、セイバーにそつ告げる

「な！サイガその剣は！？」

「驚いた。何でサイガがその剣を持っているの！？」

二人が驚くのも当然だ。俺が今左手に持つてるのは、両刃の剣の聖  
剣デュランダルなのだから

「イリヤスフィール、一つ頼みがあるんだがいいか？」

「何? 見逃してくれとでも言つ氣なの?」

「ああ、その通りだ。だがそれは俺がバーサーカーを一回殺したら  
だ」

「・・・サイガ、貴方バーサーカーの宝具に気が付いたの?」

「ぐラクレスで有名なのは、最後の焼死と十一の功業だ。もしかし  
たらと考へてみたが、まさかバーサーカーの宝具は常時開放型で十  
一回蘇生する宝具とはな」

だが恐らくまだ何かあるだろ? 一定の攻撃を喰らわないか、一定  
ランクの宝具では傷もつけれないなど

「いいわ。バーサーカーを一回殺したら見逃してあげる。そんなこ  
と絶対に無理だから」

「そうか。ならセイバー、俺が一人で奴を殺す」

「サイガ、いくら貴方がその剣を持っていても無理です! 全員で協  
力して奴を倒すべきです!」

「やつてみなければ分からんさ」

そつセイバーに告げると、再度バーサーカーに向かう

「サイガ！」

「やりなさいバーサーカー。お兄ちゃんの前に、サイガを殺しなさい！」

「！」

（魔眼開放 モード直死！）

向かってくるバーサーカーを前に、俺は自身の魔眼を開放した

「くーうう」

頭に、痛みがはしるがそれに耐えバーサーカーを見る

（ちー点は見えないか）

俺の魔眼の一つ直死の魔眼は、遠野志貴や両儀式のように精神集中したりして、点が見える訳ではない

不安定過敏の為見える時もあれば、見えない時があるといった状態である

無論点が見える時は、頭が割れるような激痛に襲われるが

点が見える確率は、恐らく三十%といったところだらう

だが死の線は、はつきり見える為殺す」とは出来る

「…」

「五月蠅いんだよテカブツー」

降り下ろされた斧剣の線をなぞり、真つ一つに斬り裂き

「…」

「黙れと言つてゐるのが聞こえないのか?」

左腕のストレートを避けず逆に腕の線をなぞりバラバラに斬り裂き

「終わりだ」

「…………！」

そのまま、バーサーカーの首の線をなぞり斬り飛ばした

援護側 side

「バーサーカーを、あんなにあっさりと殺した何て」

「なあ、一体今彩雅は何をしたんだ？」

援護側の三人は啞然としながら、バーサーカーを殺した彩雅を見て  
いた

「どうやら、何か特殊な方法を使いバーサーカーを一瞬にして殺し  
たようだ」

「あの剣の力じゃないのか？」

衛宮がアーチャーに問う

「確かに、あの聖剣、デュランダルの力なら、真名開放で奴を殺すことが出来るかもしけん。だが奴はそれをせず通常状態でバー・サーバーを殺した」

「夜月君が、真名開放以外の何らかの方法で殺したのは明らかね」

「でもだからって、あんな簡単に殺せるのか？あんな化け物みたいな奴を」

「それは夜月君に聞けば分かるわ。後で彼に聞きましょう」

「いいのかリン？今の内に、始末したほうがいいと私は思うが」

アーチャーは遠坂にそう告げるが

「殺すよりも、同盟を組むことにしてしまじょ。彼と同盟を組めば、かなりの戦力になると思うから」

遠坂は、彩雅の戦闘能力を見て同盟をすることにしたようだ

「君が、そう言うのなら私は構わないが」

アーチャーは再び彩雅を見る

（奴は何者だ？本来この聖杯戦争に、夜月彩雅などと言う人間は存在しなかつた筈。それに奴の持っている、あの聖剣『デュランダル』は解析の結果本物ということも分かつた。何故ただの人間の奴が、本物の宝具を所持している？何にせよ夜月彩雅、更に警戒が必要なようだな）

「アーチャー、アーチャー！」

「あ、すまないリン。何かね？」

アーチャーは彩雅を見るのを止め遠坂を見る

「まだ何がおこるか分からぬから、警戒を怠らないでねアーチャーに衛宮君」

「分かつていいるリン」

「分かつてゐる遠坂」

二人は再度弓を構え、バーサーカー達のほうを見る

援護側 side out

イリヤ side

「嘘！」

私の目の前で、バーサーカーがあつさり一回殺されてしまった

ただの人間であるサイガに、最強のバーサーカーがあつさりと

「サイガ貴方は一体何者？」

私はそうサイガに聞いていた

イリヤ side out

（魔眼開放停止、モード通常。リミットまでに殺せたか）

魔眼を元の目に戻し、セイバーの所へ向かおうとする

「サイガ、貴方は一体何者？」

イリヤスフィールにそう問われた

「ただの人間だよ。・・・まあちょっと人間離れしてるが」

「そう。・・・今回は見逃してあげるけど次はないから。行こうバ  
ーサーカー」

「！」

バーサーカーは蘇生し、イリヤスフィールを肩の上に乗せると闇に  
消えていった

「大丈夫ですかサイガ？」

「ああ、ちゅうと頭が痛いぐらいだ

セイバーの所に向かい、笑いながらセイバーにそう叫ぶ

「終わって早々悪いんだけど、夜用電話があるんだけど

遠坂達もやつてきて、遠坂が俺に告げる

「話なり衛門の家でいいか? まずは座りたいから····よ

いかんな意識が保てん。やはり、久しぶりに魔眼を開眼したせいだな

(「なんじや、サーヴァントは····)

俺はそのまま気を失い倒れた

## ホムンクルスと狂戦士（後書き）

次回は学園の話になると思います

では次回もよろしくお願いします

## 騎乗兵との遭遇（繪書卷）

今日は騎乗兵と会いました

では戻してくれと願っています

## 騎乗兵との遭遇

「・・・此所は?」

目を開けると、知らない天井が目に入った

恐らく衛富の家だろ?。魔眼を開眼したせいで倒れるとは、やはり暫く開眼をしてなかつたせいだな

「痛!」

頭が痛い。全く最悪の目覚めだな

「?何だこれは?」

立ち上がり、枕元にあつた制服を着ていると紙が上から落ちてきた

『やあ管理者だよ。一息ついたみたいだから、説明しとくよ。君の家を用意するの忘れてたから衛富士郎の家に住んでくれ。一応火事で、家が燃えたつて全員に暗示は掛けであるから。着替えとかは、僕が用意して部屋の隅に置いておいたよ』

内容を確認すると、紙は直ぐに消えてしまった。書かれてた通り部屋の隅を見てみると、確かに衣服が入った段ボールが一つ置かれていた

片方を確かめてみると俺の普段の私服の、紺のジーパンに白のポロシャツ、黒と白の長Tに黒と白のパーカーが入っていた

もう片方には

「・・・これはハザマの衣装か?」

もう一つの段ボールを確かめてみると、中には格ゲーBLAZBLUEのキャラ、ハザマの着ているスーツにYシャツ ネクタイ 帽子などが入っていた

「夜は大体ハザマの格好で、それ以外は私服で行くようにしてよろしく?」

また上から紙が落ちてきた

『最後に、サーヴァント召喚の呪文と魔方陣を書いておくから、これを見て自分で召喚したい時に召喚して』

紙を読み終えると、その紙は消えた。すると、数秒後にまた一枚紙が落ちてきた。内容を確認すると、上の部分にサーヴァント召喚の呪文が書かれており、下には魔方陣が書かれていた。この紙は消えないようなのでポケットにしまった

その後制服を着て、段ボールを閉じ部屋を出ようと襖が開いた

「あーおはようございます。夜月先輩」

其所には、紫色の少し長い髪をしたが虚うな女の子がいた。成長した間桐桜のようだ

「・・・間桐桜か。俺に何か用か?」

「はい。先輩に、朝一はんが出来たから夜月先輩を起にしきてくれと言われてきました」

少し微笑んだ顔で俺にそう告げる。あれから十年、更に壊れていな  
いだろうかと思っていたが、まだ全てが壊れてるわけではないようだ

「やうか。悪いな、わざわざ」

「いえ、じゃあ食卓に行きましょ。夜月先輩」

「あ

俺は間桐と一緒に食卓に向かつた。しかし向かつてこの途中

「なあ間桐

「何ですか夜月先輩？」

何故か間桐に声を掛けてしまい

「お前今幸せか？」

「…」

などとうつかり聞いてしまった。簡単に答える訳何かねえのに

「驚かせてすまない。今のは忘れてくれ

「は、はい」

その後はお互に気まずく、無言で俺と間桐は食卓に向かった

「夜月君、起きたのね。おはよー」

何か、短髪で私服にエプロン姿の女人が話掛けてきた。誰だこの人？

「おはよー、おはよー」

挨拶して適当に座る

「夜月君も災難よね。家を火事で無くして、昨日は道端で倒れてたつて士郎から聞いたわよ」

「いえ、其処まで災難ではないですよ」

「士郎と相談したんだけど、夜月君もセイバーちゃんと一緒に士郎の家で暮らせば？」

何時言おうか、考えていたら向こうから言ってくれたよ

「いいのか衛宮？」

「ああ、部屋はたくさん余ってるからな。彩雅がいいんなら俺は別に構わないぞ」

「すまない。ならお言葉に甘えさせてもいい」

とりあえず、泊まる所も確保出来たな。・・・後は、向かってくる敵を排除するのみ

現在確認出来る敵は、ランサーにバーサーカー。状況次第ではアーチャーも敵になる可能性もあるな

まだ遭遇していないサーヴァントは、アサシン ライダー キャスターの三体かい

「夜月君。ぼうつとしてないで、早く食べないと遅刻するわよ～」

名前を知らない人が、そつ言いながら「飯とおかずをパクパク食べている

「桜ちゃん、お代わり！」

「はい。藤村先生」

名前は藤村ね。どうやら先生らしきな

「私もお願いします」

「はい。セイバーさん」

それにして、コイツ等、朝からよく食つた

とつあえず、俺も一緒に飯を食つた

「土郎に桜ちゃんに夜月君、遅刻しないよつね～」

飯を食い終わつた後、藤村先生は俺達にさしつづけると、速足で衛宮の家を後にしていた

「桜、俺ちょっとセイバーに話があるから彩雅と先に行つてくれ

ないか？」

「分かりました。先輩、遅刻しなこうと氣をつけてください」

「じゃあな衛宮、また後でな」

何故か、俺は間桐と一緒に学校に登校することになってしまった

それにもしても、歩いて行く何てだるいな。だからって、神速のスピードで行けないし全く学校とは面倒だな

「で、せつから俺をチラチラ見て何か用か間桐？」

「す、すこません」

尋ねると、慌てて何回も頭を下げてきた。別に其処まで頭下げなくていいんだが

「別に、其処まで頭下げなくていい。何か用があるのか？」

「い、いえ。今日は普段の夜月先輩と違つたって思つて

普段の俺?俺つて普段、どういづ設定になつてたんだ

「普段と違つ?そんなことはないだろ」

「何時も夜月先輩は、無口で口を聞いてるところを見たことがなかつたからです」

普段の俺は、無口で口を聞かない奴といづ設定だったのかよ

「そうか。・・・うん?」

そのまま、校門を通過した時何か違和感を感じた

(何だこの違和感は?何かに覆われてるような感じは?)

「どうかしましたか、夜月先輩?」

難しい顔をしていたせいか、間桐が心配そうに俺を見ていた

「いや、何でもない」

「そうですか。じゃあ私は朝練があるので此所で」

「ああ」

間桐と別れた後、俺は直ぐに屋上に向かった

(魔眼開放 モード・直視)

もう一つの、直視の魔眼を開眼した

「何だ、此れは!？」

周りを見ると、赤く太い糸のよつた物が学園全体を覆っているのが  
見えた

「これは結界か?」

見た感じ、どのよつた結界が分からぬ。だが発動したら、どんな  
もないことになるよつた気がする

どつする。今の内に直死の魔眼で破壊してくべきか？

だが、直死を使って昨日と同じように倒れたら、結界をはつた奴に殺されかねん

更に直死は、解除したら一分間のインターバルを必要とする。無論、その一分間は俺は無防備になる為に当然狙われるだろう

恐らく、遠坂や衛宮も結界には気付いている筈。ならアイツ等に任せよ。俺が破壊する時は、最後のどうじょうもない時にしよう

（魔眼開放停止 モード通常）

魔眼を解除した後

「影分身」

自身の分身を作り出し

「適当に授業受けて、全部終わったら屋上に寝つてこい」

「了解した」

分身はそう言つと、屋上を後にした。授業何か受けてられるか面倒くさい

「うん？あの林」

屋上から周りを見ていると、林に目が止まつた

「何か、あの林気になるな。・・・行つてみるか」

氣配を完全に消し、俺は一人林に向かい走り出した。以外にも、特に何事もなく林に入れた

（魔眼開放 モード・直視）

再び直視の魔眼を開眼し、一ヶ所の地面を見てみると、その地点に魔力が集中している

此所が結界の基点か。なら近くにサー・ヴァントがいるな

「驚いた。貴方には、この基点が見えるのですね」

後ろから声が聞こえ、振り向いて見ると其の隣には紫色の長髪で両目には眼帯をし、露出の多い黒い服を着た美人が立っていた

騎乗兵との遭遇（後書き）

次回の更新は出来るだけ早くするつもりです

では次回も宜しくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5350y/>

---

Fate 戦いのはてに残るもの

2011年12月25日13時46分発行